

届かぬ手紙



平野 光芳

3月上旬、ヨハネスブルクの自宅に届いた交通違反の通知に仰天した。中身は時速十数キロの速度超過で、反則金約9000円

の最も軽微な違反だ。証拠写真もあって言い逃れはできない。問題は届くまでの日数である。書類には「2月1日に投函」とあり、納付期限（1カ月以内）を既に過ぎてている。通知は同時に2通届いていて、もう1通は後から出された督促状だった。

南アフリカでは郵便サービスの劣化が著しい。もはや「届かないのが当たり前」なのだ。小学生の長女は日本の友人にあててエメールアドレスを3回出してはいるが、届いたのは1回だけ。しかもそれはポストに入れてから1年4カ月後だった。他の2通は今も南アのどこかで眠っている可能性が高い。

背景には南ア郵政公社の苦境がある。最後に利益を計上したのは2004年で、以来ずっと赤字が続く。インターネットの普及で郵便の取扱量が減り続けている上に、新型コロナウイルス禍ではロックダウンで郵便サービスの一時停止に追い込まれた。南アではか

つてアパルトヘイト（人種隔離）への反対運動で各種労働組合が中核を担った名残もあり、労組の影響力が非常に強い。郵政公社はビジネスが縮小しているのになかなか人員や人件費を削減できず、サービスにシワ寄せが来た。

郵政公社はサービスが悪化するから顧客が離れ、顧客が離れるからサービスが悪化するという負のスパイラルに陥ってしまった。その間を縫って民間の配達サービスが伸びている。ショッピングモールなどに店を構え、確実に届くと評判だ。ネット通販でも欠かせない存在になっている。

ただ南ア社会全体で見れば、頼りない郵便のせいもあってデジタルシフトが進んでいる。私も赴任して2年半になるが、これまで個人的に受け取った郵便物は交通違反通知だけで、あとは全てオンラインでのやり取り。郵便で文書をやり取りするという習慣自体がほぼ絶滅してしまった。

翻って日本はどうか。まだまだ郵便に対する信頼は絶大で、行政からの大事な文書も送られてくる。郵便物ゼロの生活は考えられない。ただ郵便の利便性が逆に社会のデジタル化を阻んでいる面も否定できない。南アで暮らしているとそれを痛感する。